

古代からの「貴・賤」観や「浄・穢」観に由来する差別。被差別部落への結婚、就職など差別は二一世紀でも絶えない。敗戦後の激動期に全学連結成へと決起した文学青年は、さまざまな異文化体験から人生の軌道を大きく変える。

民に寄り添い差別に抗う 沖浦和光

ジャーナリスト 西村 秀樹

【人の世に熱あれ 水平社結成九〇年】

京都市動物園や京都国立近代美術館がならぶ岡崎公園から東山の山並みは目の前。今年（二〇一二年）三月三日、光は春、木立はまだ冬の装い。岡崎公園内にある京都会館で、全国水平社が創立されて九〇年の記念集會が開かれた。参加者一八〇〇人。

主催の部落解放同盟は、部落解放運動の指導者の名前をつけた松本治一郎賞を沖浦和光（桃山学院大学名誉教授）に授与した。京都大学の上田正昭名誉教授も同時に受賞した。この地にはかつて岡崎公会堂が位置、九〇年前のこの

日、全国各地から部落民三〇〇〇人が集まり、発起人の西光万吉らが作成した水平社宣言を高らかに読み上げた。

「人の世に熱あれ、人間に光りあれ」と。水平社宣言は日本ではもちろん、世界でも最も早い人権擁護の宣言の一つである。

【戦時下の青春】

全国水平社九〇年の記念集會を前に、沖浦和光宅を訪ねた。大阪ミナミの難波駅から南海電車で郊外へ三〇分余。ニュータウンの高層マンションの一角。蔵書の置き場所に

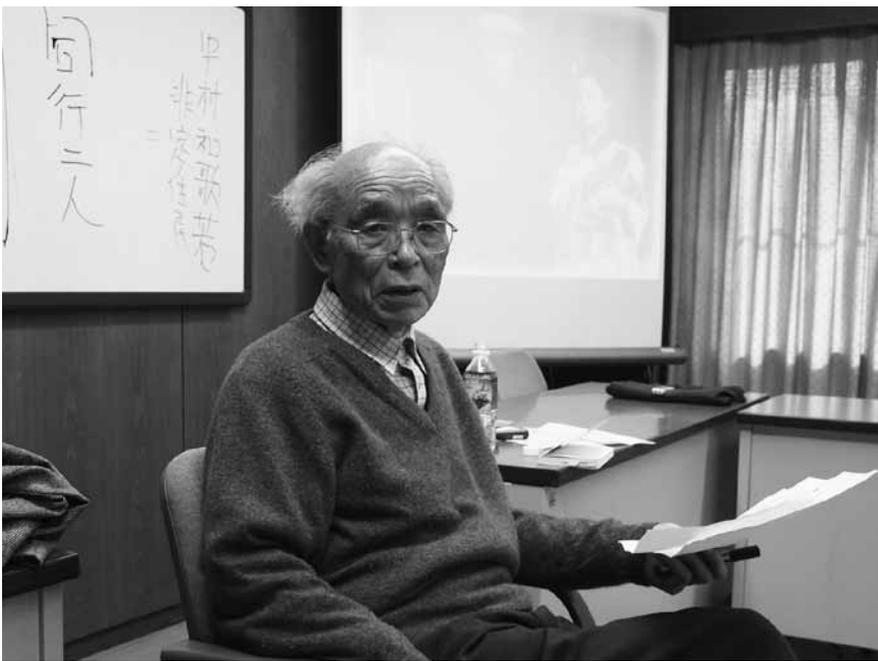
困り購入したという勉強部屋からは、大和と河内を結ぶ金剛山の山並みを一望のもとに見渡すことができる。日本古代史の現場を目の前にしながら、いつも読書し原稿を書いているわけだ。

生まれたのは一九二七（昭和二年）の一月一日。今年、八五歳。元気で暮らしてきたが、八〇歳を超えてから体調を崩し、腎臓が機能不全と判明した。なんでも生まれ育った大阪郊外の箕面で子どものころバスにひかれ内臓破裂になったのが原因ではないかと沖浦はいう。いまは週に三回透析に通うが、それでも昨年も大好きなインドネシアや国内を旅行するほど、身体と頭脳はまだ元気だ。

「祖先は瀬戸内の海賊だ」というのが沖浦の口癖。瀬戸内海に面した広島県の鞆の浦近くで先祖代々船乗りとして暮らした。祖父は大型船の機関長、しばしば船が寄港する大阪に一家は移り住んだ。和光は大阪の郊外箕面で生まれたが、昭和恐慌のあおりで父が失業し大阪市内に引っ越した。転居先近くに釜ヶ崎のスラムや西浜の被差別部落があり、紀州街道を行き交う旅芸人に興味をもったという。

桃山学院中学を経て、一七歳（一九四四年）で旧制浪速高校（現在の大阪大学）に進学した。

日本はすでにアジア・太平洋戦争の真っただ中、豊中の浪速高校から池田の自動車工場（現在のダイハツ）へ学徒



沖浦和光は遊女や悪所などをテーマに「沖浦塾」を開く。話は尽きない（大阪市内で、筆者撮影）

動員され、油にまみれて働いた。

日本の敗色がこくなつた一九四五(昭和二〇)年八月四日、「あす、玉音放送がある」との予告が流れると、クラスメイトとポツダム宣言を受け入れて戦争を止めるべきかどうか議論したが、和平、抗戦が拮抗し結論が出ない。あぐく自宅に帰り父にどう思うか尋ねた。父はぼつりと「こんな戦争は早く負けた方がいい」と口にした。父は腹の底で軍国主義の世の対し距離感を抱いていたのだ。

父は早稲田の商科時代、築地小劇場の芝居に入り浸り、大正デモクラシーそのものの青春を送った。そんなリベラルな父親だったから、息子も批判精神が旺盛に育った。高校時代からヨーロッパ文学に親しみ小林秀雄の大ファンで、将来は文芸評論家になりたいと考えていた。

敗戦直後の激動の時代。「日本はどうなるのか」と思い悩むうち、沖浦はしだいにマルクス主義に傾倒していった。戦争中の文学グループがそのまま社会科学研究会に発展した。大阪商科大(現大阪市大)では戦中から左翼運動にかかわるグループが、反戦運動をやつて十数人が検挙された。戦後、獄中から出てきた彼らが先頭に立つて、大阪の学生社研連合会が結成され、敗戦から一か月後には大阪の各校が合同で研究会を開くまでになった。

敗戦の年一〇月一〇日、大阪の中之島中央公会堂で、戦争中治安維持法違反で入獄していた社会主義者の集会が開かれた。その頃が戦後の左翼運動とりわけ学生運動や労働運動の高揚期に当たる。

「二・一ゼネスト」の十日前に共産党主催で「全国学校細胞代表者会議」が東大で開かれた。大阪商科大の朽木清などと沖浦は上京した。この会議で大阪勢ががんばつて党の青年部と東大細胞の合作した運動方針案を否決した。

ゼネストを含む闘争戦術を組んで、戦後教育復興の壮大なプログラムを組まなければならない。本部方針は自治会中心の右翼日和見主義であり、激動の戦後の情勢をつかみとっていないというのが、大阪方の主張であった。本部原案は党中央の青年対策部と東大細胞の合作だったが、それが全国大会で否決された。共産党としてはかつてない事態であった。

当時の東大細胞では、渡辺恒雄(のち読売新聞グループ会長)ら主体性論を中心に文化闘争を重視するグループが握っていたが、それに経済・法学部の一部が反対して対決した。そこへ沖浦ら新一年生が入ってくると、ますます攻めてくると予想された。

原案を作成した東大細胞の主力は、沖浦ら新一年生が入ってくるややこしくなると思つた。その通り、新一年生は戦鬪的グループを結集して上級生と正面から対峙した。

入学してしばらくおとなしくしていたが、やがて同じ新一年生の力石定一や武井昭夫らと話し合つて、「全学連」の

かれるので、集会に参加したいと教師に提案すると、「参加はダメだが、見学ならいいだろう」と休講してクラス全員で向かった。参加者の熱気は感じたが、非転向で出てきたリーダーの演説には失望させられたという。

【東大で全学連結へ】

一九四七(昭和二二)年四月、沖浦は東京帝国大学文学部に進学した。上京した直後の四月六日、沖浦は日本共産党の指導者宮本顕治宅を訪問した。妻百合子が作家で有名であったので百合子の駒込林町の住所を頼りに訪れたが、玄関先の桜の花びらが舞っていたのをよく覚えていっている。

やがて顕治がどてら姿で奥から出てきた。宮本は芥川龍之介を論じた『敗北の文学』で雑誌『改造』の懸賞論文に当選し学生時代に文壇にデビューしたが、沖浦は宮本に『敗北の文学』を読んで感激しましたので、いろいろとお話をうかがいたいと思つてやつてきました」と切り出した。ミヤケン「まあ上がれ」と手招きした。「今どきの学生はどういう本を読んで何を勉強しているのか」と質問を重ね、ずいぶん長い時間話し込んだという。ミヤケンは終始聞き手に回り、沖浦が話す敗戦前後の庶民の暮らしや大阪の学生運動や労働運動の現状に耳を傾けた。

沖浦が大学に入学した一九四七年の二月、労働組合が計画した「二・一ゼネスト」が占領軍総司令部の命令で中止された。結成に向けて東大内でひとあはれすることになった。入学して半年、東大の共産党細胞内でキャップを決める選挙があった。当時は立候補制できわめて民主的だった。沖浦がキャップに選ばれた。

翌年、沖浦から一年後輩に、安東仁兵衛をはじめ上田耕一郎、ら数十人の新入生を迎えて、東大細胞は総勢二百人近くに、全国的な組織運動に乗り出す基盤ができた。こうなれば念願の「全学連」結成にあと一歩だ。

四八年六月、国立大学の授業料が六円から六〇円へと一挙に一〇倍に跳ね上がる計画を聞きつけ、全学連は文部省との交渉を計画した。日比谷野外音楽堂に学生だけで二万人の集会を開き、文部省にデモで押し掛け、文部大臣との面会が実現した。教育の果たす役割について、文部大臣と学生代表がさして議論。一九四〇年代後半はそういう時代だったんだと、話を聞きながら私は胸の中でひとりごちた。六月二六日、全学連結成大会が開かれ、全学連が発足する。沖浦は東大だけでなく全国の学生運動の指導者として登場した。

この年(四八年)十一月、沖浦は同じ学生運動の仲間、全学連の初代委員長の武井昭夫と共著で論文「民主革命と学生運動の地位」を雑誌『文化革命』に寄稿した。当時、共産党では労働者、農民が革命運動の主体であり、学生は所詮プチブル(小市民)だからと学生運動を重んじていなかった。

た。このため沖浦や武井らは学生運動をもっと重視し民主革命の一翼として位置づけるように主張した。その一方で、沖浦は論文『太宰治論ノート』を岩波書店の雑誌『文学』に寄稿し、文学研究者として一步を踏み出していた。

一九四九年中国共産党が指導した中国革命が成就。翌年一月コミンフォルムの日本共産党批判をきっかけに、日本共産党は国際派と所感派に分裂する。六月に朝鮮戦争勃発、日本共産党内部は軍事武装闘争に走るグループとそれを批判するグループで分派闘争が続いたあげく、三年後朝鮮戦争が休戦を迎え、日本共産党内の国際派と所感派は五年に一応の統一をする。

この過程で全学連はバラバラに解体するが、東大細胞の主力は国際派として活動し、ほとんど全員が所感派の党から除名された。沖浦も共産党から除名され、疾風怒濤の時代を迎える。

【中学校の英語教師から、大学の教員へ】

大学はすでに新制の東京大学に替り、沖浦は旧制の東京帝国大学文学部最後の卒業生となった。その一九五三年春の期末試験で、文学部の指導教官、中野好夫教授が教室にいた沖浦を見つけると、「後で研究室に來れ」と書いたメモをそつと渡した。研究室に入ると、中野は「卒業後の進路は」と質問、「改造の編集部を考えています」と返事したら、

記念して大学を増設するというので、桃山学院中学OBの沖浦は英文学の教師に誘われ、大阪に赴く。沖浦の著作リストで確認すると、六一年に『講座現代のイデオロギー』の一卷として『日本のマルクス主義』を三一書房から出版する一方で、研究論文として六二年に『アメリカ文学におけるピューリタニズムの思想的意義』を出しているが、大学院論文であろう。

沖浦はこれまでの日本共産党が指導するマルクス主義ではダメだと結論に達し、六四年安東仁兵衛、長洲一二（横浜国立大教授、のち神奈川県知事）らが雑誌『現代の理論』（第二次）を創刊すると、安東と親しい沖浦もそれに参加し主力メンバーとして活躍する。

五〇年代後半から、ハンガリー動乱（五六年）やフルシチョフソ連首相によるスターリン批判をきっかけに、スターリン主義全般への批判が強まる一方、先進国革命論である構造改革論などヨーロッパの革新的共産主義運動が日本の運動にも影響を与え、月刊『現代の理論』はそうしたスターリン批判とヨーロッパ共産主義運動の新しい波導入に大きな役割を果たす。

【インドで思想的転回】

一九七三年には、桃山学院大での教員生活も一〇年を超し、沖浦はロンドンに一年間留学する。その帰りである、

「うーん、ジャーナリズムはむつかしいぞ」と首を縦にふらない。事実、アジア太平洋戦争中、横浜事件などで権力から言論弾圧を受けた雑誌『改造』は、二年後の五五年に廃刊してしまう。

「君たちはプロレタリア革命を唱えているが、労働者の実際の生活や運動を知らない。下町の労働者街で教師をやりながら勉強を一からやり直したらどうだ」とアドバイスされた。沖浦は、中野教授の勧めを受け入れ東京都の公立中学校で英語の教師になった。労働者や下請けの町工場の多い大田区の大森中学を選んだ。大森で中学生相手に英語を教えるかたわら、労働運動にも力を入れた。教職員組合員のデモ隊の参加者に、のちに沖浦と結婚することになる同僚の英語教師、恵子（あきこ）がいた。沖浦は親友の安東仁兵衛がたまたま同じデモの隊列にやつてきて一緒に歩いたが、「いい娘がいるじゃないか」と勧めたという。私が「ホントウですか」と冗談めかして尋ねても沖浦は微笑むばかり。

同じ時期に東大で学生運動に走り回った仲間のうち、日本共産党に残ったのが上田耕一郎（のち副委員長）、不破哲三（のち議長）の兄弟。一方、共産党を除名、あるいは自発的に党員を辞めたのが多数であったが、力石定一（法政大名誉教授）、堤清二（詩人）や高沢寅男（のち日本社会党副書記長）などがある。

一九五九年、桃山学院にキリスト教新教伝来一〇〇年を

沖浦が大きく変わったのは。

「西ヨーロッパに学ぶべきものはなかった」とロンドンでそう感じた沖浦はいう。漱石とは時代が違うのだ。インドに一か月滞在した。

インドで沖浦は被差別賤民の居住地を訪れ、カースト制度の実態を目の当たりにし、大きなショックを受けた。その翌年にはアフリカ、翌々年には中国とインドネシアを訪れ、次々と異文化を体験した。それ以降、沖浦の関心は、英文学というより社会思想史や比較文化論など、民に寄り添い、差別の問題に正面から向き合うことを選ぶ。

沖浦がインドを訪れた翌年（七四年一月）、兵庫県の但馬地方の県立八鹿高校で部落差別をめぐる大きな事件が起きる。背景には、部落解放運動をめぐって、部落解放同盟と日本共産党との対立があった。

神戸地方裁判所は、解放同盟側の被告に執行猶予付きの有罪判決を下した一方で、教員側が被差別部落から通っている生徒たちが作ろうとした解放問題研究会の設立を認めないなど差別的な取り扱いがあったことを判決で認めた。

沖浦は、七五年七月、論文「南但馬地方の被差別部落」を雑誌『現代教育科学』に寄稿。同じ時期に『現代の理論』に「南但馬の小さな部落で」を寄稿するなど、精力的に八鹿高校事件に言及している。

【民衆芸能の中へ】

一九八〇年代に入り、沖浦は差別と芸能の世界にのめり込んでいく。週刊誌「朝日ジャーナル」で、作家野間宏と対談し、六回連載される。初回のタイトルは「差別・被差別の新座標を探る。インドの旅から中国・日本へ」。

翌年にはこの二人に、『解放新聞』の編集長土方鉄を加えた鼎談「アジアにおける被差別民衆の歴史と文化」が雑誌『部落解放』（八三年一月）に掲載され、こうした流れはさらに『アジアの聖と賤』『日本の聖と賤』（人文書院、全四巻）の出版へと進む。このころから、沖浦のキーワードは「日本の民衆文化」と「賤民芸能」だ。

このころ沖浦が書いた論文「日本の祭祀儀礼と賤民芸能」には、サブタイトルとして「芸能はなぜ賤民層によって担われたのか」とか、「日本文化の巨大な地下水脈『賤民文化』に光をあてる」など、タイトルやサブタイトルを見れば、自ずと中身が判るものとなっている。

俳優三國連太郎との対談を上下二冊の本にまとめた『芸能と差別の深層』（ちくま文庫、二〇〇五年）は、日本を代表する名優が自らの出自をカムアウトしたという意味で時代を画する本となった。この本は、例えば能狂言における世阿弥とか、芸能における賤民の役割を、具体的に示している判りやすい本である。

う著作がある。渥美清主演の映画と同様、「がまの油売り」といつて若者に判るかどうか自信がないが、街角で話術巧みに口上をのべ客寄せした上で、クスリや雑貨品を売るスタイルの商人のことだが、インドネシアにも寅さんがたくさんいる実態を歴史的、地理的に探求したルポなのだが、寅さん以上に、その文体というか口上まがいの筆が楽しい本だ。先の『竹の民俗誌』（岩波新書）を担当した、岩波書店の編集者・川上隆志（現専修大学教授）がこの本も担当した。

沖浦と編集者の川上などを含めツアーを組んでインドネシアを旅行したことがある。目的地まで片道三日。初日の朝、関西空港と成田空港からそれぞれ飛び立ちバリ島デンパサール空港で集合、その夜はバリで一泊。

翌日、バリ島からアルファベットのKの文字の形をしたスラウエシ島の西海岸マカッサル（旧称ウジュンパンダ）まで飛行機で飛び、さらにローカル航空に乗り継ぎ、この島の東海岸ケンダリまで飛び、二泊目。さらに三日目、ここからマイクロバスで南下、大型のフェリーボートでブトゥン島バウバウ市にようやくたどり着いた。到着すると、街の山手にある城のような巨大な市庁舎に連れて行かれ、市長も参加してのレセプション。テレビチームまで取材に来て、その夜、ホテルで沖浦ツアーご到着のニュースをわが目で確認するはめとなった。

国会図書館のホームページで「沖浦和光」と検索をかけると、著作・論文一六六点の中で、検索ランキングのトップはこの本だ。ランキングの二位以下は、『幻の漂泊民・サンカ』、『悪所の民俗誌』色町・芝居町のトポロジー』『旅芸人のいた風景』遍歴・流浪・渡世』と続く。若い読書人のなかには、沖浦のことをかつて英文学を志したことなどつゆ知らず、こうした芸能史の分野の専門家と思う人がいるのもまんざら読者の勘違いだけではない。

【インドネシアへ】

このころから沖浦は日本各地の被差別部落を訪れ、差別で苦しんできた部落民への生活実態の聞き書きを本格化する。『竹の民俗誌』（岩波新書）はそうした聞き書きの成果だ。例えば雪駄。竹の皮に動物の皮を貼付け、裏側のかかと部分に留め金を打ち付けた草履のこと。茶道の開祖、千利休が発明したとも利休と親交のあった茶人、ノ貫ひろかんが発明したとも言われるが、竹の文化は被差別賤民の文化なのだと沖浦はいう。

七〇年代前半のインドにおけるカースト体験が、沖浦にとつて思想的転回の大きなきっかけになったことは先に述べたが、そのインドと並び沖浦が毎年のように訪れるのがインドネシアだ。

沖浦には『インドネシアの寅さん』熱帯の民俗誌』というバウバウ訪問の目的は、「かぐや姫伝説」が当地にあると沖浦が文献で見つけたからである。かつてこの地の先住民が、フロレンス海を望む丘の上に侵攻してきたオランダ軍と対峙したという城があり、その城内に竹の茂みがあった。かぐや姫が隠れるほど竹は太くはなかった。日本では日の丸に象徴されるように太陽信仰（当然のことながら、アマテラスを始祖とする天皇教もその一つ）がメインストリームだが、一方でかぐや姫の物語が天皇家の皇子たちや貴公子をたびたびテストしたあげく、こけにするストーリーが展開されるが、月の満ち欠けを中心として別の宗教心があることを、片道三日の旅で思い知った。沖浦はかぐや姫をシンボルに竹取物語を重視する。文化を一つだけでなく、多様な角度からの視座をたいせつにするところに、沖浦の真骨頂があるのではないだろうか。

ブトゥン島バウバウ市の城内の竹の茂みの前で、編集者の川上が沖浦に「記念写真を撮りましょうか」と提案した。日ごろそのような提案を受け入れない沖浦も片道三日の旅のせいなのか、竹の前で記念写真に収まった。『竹の民俗誌』刊行から一九九九年が経過していた。

【部落解放運動の再生へ】

二〇〇七年三月、部落解放同盟は、上田正昭、沖浦ら学者、弁護士やジャーナリスト一五人に対し「部落解放運動

に対する提言委員会」メンバーを委託し、年末に提言をまとめた。この提言委員会が発足した背景には、二〇〇六年大阪、奈良などで部落解放運動にまつわる不祥事が連発したことがあげられる。解放同盟ではそうした不祥事を「偶発的で個人的な問題ではなく、同和対策事業特別措置法以来、運動内部で体質化され構造化した諸要因にもとづくもの」と分析し、「戦後最大の危機に直面」と危機感をすなおに表明した。それほど大きな打撃を部落解放運動に一連の不祥事はもたらした。

飛鳥会事件というのは、大阪の飛鳥支部長が長年にわたって駐車場収入を横領していたもので、一審で懲役六年の有罪判決を受け控訴中に病死した。奈良のケースは、部落解放同盟員の奈良市役所職員が病欠と偽りながら給与を不正に受給していた事件である。どん底まで追い込まれた部落解放運動を立て直すために提言委員会に求められたものは大きい。

提言委員会は、全国水平社の集会が初めて開かれた岡崎公会堂跡地の京都會館を会場に、一二回の会合が開かれ、その年の一二月提言を同盟側に手渡した。提言をくわしく紹介する余裕はないが、一連の不祥事の背景分析と問題点の目次だけを列挙すると、(一)行政と運動団体幹部の癒着、(二)手段(事業)と目的(解放)の本末転倒、(三)内なる敵に対する甘さ、(四)不正をチェックできなかった組織上の

欠陥など、厳しい自己分析と指摘がならぶ。結論部分には、
一)組織体制の全体的見直しの検討、二)組織内の学習機関の見直しと常設化、三)歴史、文化、民俗の分野での啓発と研究活動の強化などの文字がならんでいる。

冒頭に記したように、全国水平社九〇年を迎えた今年三月三日、京都會館での記念集会の席上、部落解放同盟が松本治一郎賞を授与したのは、沖浦和光と「提言委員会」の座長、上田正昭京都大学名誉教授の二人であった。このことは、九〇年におよぶ波瀾万丈の部落解放運動において「提言委員会」が大きなメルクマールであったことを示している。

先ほどのインドネシアを含め、こうした沖浦ツアーと称する学習旅行は、夏はインドネシアに毎年十数人が参加、秋の連休には全国の大学で同和教育を担当する教員を中心に毎年百人を超すメンバーが集まって、被差別部落や古代の朝鮮人の渡来の寺社などをフィールドワークする。そうした学習旅行に数多くの人びとが毎年のように参加し長続きするのも、戦前の旧制高校生、敗戦直後の大学生、中学教師を経て大学で教えるかたわら、常に庶民と同じまなざし、視線で市井の人びとをこよなく愛してきた沖浦の人柄の結果ではないだろうか。(文中、敬称略)

にしむら・ひさき

一九五一年生まれ。ジャーナリスト。著書に「北朝鮮抑留」第十八富士丸事件の真相(岩波現代文庫)、大阪で闘った朝鮮戦争(吹田・枚方事件の青春群像)(岩波書店)